

第8章 調査の成果のまとめ

【遺跡の範囲】

調査地点の北に隣接した左京区岩倉忠在地町では、1976年の発掘調査で弥生時代後期～古墳時代初頭の土器などが出土していて、「岩倉忠在地遺跡」と名づけられている。今回の調査地は、京都市による遺跡指定範囲の外部にあたるが、調査を進めると、古墳時代初頭の竪穴住居や柱穴・土坑・溝などが検出された。また、同志社高校理科館建設の際の発掘調査でも、断片的にはあるが古墳時代前期の土器片が出土している。このため、当遺跡の範囲は南へ約100m以上は広がるものと考えられる

【検出された遺構】

・住居関連の遺構

庄内式期・古墳時代初頭に形成されたと考えられる、方形の竪穴住居8棟および約300もの柱穴群が検出された。遺跡全体は江戸時代の耕作に伴う削平を受けていて、柱穴が多数検出されているものの竪穴住居の平面構造が残存しているものはわずかしかない。検出された竪穴住居も、深さ約10センチ程度しか残存しておらず、削平され残った床面近くの部分だけがわかる状態であった。ただ、住居を構成していた柱穴群が調査区の広い範囲から検出されているため、集落の範囲は今回の発掘調査区域の全域にわたり、さらにそれを超えて広がっていたと考えられる。

・未焼成粘土塊の出土

竪穴住居230床面の北東隅からは、白色粘土塊が検出された。粘土は住居床面を数cm程度浅く掘りくぼめた中に平たく固めておかれていた。また、床面では、ほかにも粘土の小片が検出されている。このことから、竪穴住居230では粘土を用いた作業が行われていたと考えられる。さらにこれに近い調査区東半部の複数の土坑・溝から同様の白色粘土塊が出土している。理化学的分析を行った結果、出土土器の胎土とこれら未焼成粘土塊の化学組成や含有砂粒種・構造は類似していることがわかった。土器作成用粘土の可能性は高い。このことから、竪穴住居230付近では盛んに土器・土製品の製作にかかわる作業が行われていたと推定される。また、竪穴住居323では床面上から土器片とともに、同様な粘土塊が出土しており、ここでも住居内で粘土を用いた作業が行われた可能性がある。土器・土製品用の素材粘土の貯蔵あるいはそれを用いた作業が行われていた範囲はこれにより今回の調査区全域にわたるとも考えられる。

・焼失住居の検出

検出された竪穴住居のうち1棟（竪穴住居1）の内側からは、炭化した建築部材や焼土が多数検出された。おそらく、火災にあったかあるいは廃絶後に焼き払われた竪穴住居と考えられる。炭化材は、住居の中央に向かって放射状に並んだ状態で検出されており、屋根を構成する建築材だったと考えられる。

また、その炭化材と焼土が重なって検出されている部分では、焼土が炭化材の上に貼りついた状態も観察できた。このことから、屋根材の上に粘土が塗りつけられていた可能性がある。ただし、壁材であった可能性も考えられる。前者だとすると、木材あるいは茅葺・草葺などの上に粘土をぬった構造の屋根だったとも推測される。このような「土葺屋根」をもつ竪穴住居の例は、群馬県中筋遺跡・黒井峯遺跡をはじめとする、火砕流や軽石降下により埋積した古墳時代集落跡で検出されているが、今回の例でも同様の構造をもつ住居の存在が示唆されている。茅葺・草葺として復元・表現されることの多い竪穴住居だが、実際には多様な上屋構造をもっていた可能性を示す調査例と言える。

また、複数の炭化材のサンプルを放射性炭素年代測定した結果、かなりばらつきのある数値が三亜出された。ただ、較正年代値の下限が3世紀前半にとどまることから、共伴する庄内式土器について近年3世紀前半・中葉という年代が予想されているが、そういった研究成果とは矛盾したものではなかった。

・土坑墓と思われる遺構

住居域の北部に、長軸1.2～1.5m・短軸0.7～0.8m 規模の平面長楕円形、深さ約0.4～0.6m の土坑が10基検出された。形態・埋積状況から土坑墓と考えられる。調査後に、持ち帰った遺構内部の土壌を詳細に調べたが、埋葬に関連する遺物（歯や装飾品の残片）は確認できなかった。

【出土遺物】

出土遺物のうち大半を占める土器は細片で詳細な時期決定が難しい。しかし、概ね弥生時代後期末～古墳時代初頭の所産の特徴はとどめている。また、集落内の廃棄施設として利用されたい谷16の中～下層からは多量の土器群が出土した。この土器群の時期は庄内式期前半と考えられる。これによって、今回検出された遺構群の形成時期の中心が庄内式期にあることは間違いないと思われる。

【調査成果の意義】

岩倉盆地では、これまで古墳時代以前の集落跡は検出されたことはない。今回の調査成果は、これまで古墳などしかわからなかった、古墳時代以前の当地域の歴史を考える上で重要である。各種の遺構群が検出された状況から、住居域・墓域を含めた集落遺跡の構造がわかる好例といえる。中でも土器製作に関係する住居施設が明確になったことも重要である。また、竪穴住居の屋根構造についても「土葺屋根」を示唆する資料が得られたことは注目される。これまで不明なことの多かった京都盆地の古墳時代開始の状況を考察する上で貴重なデータを残した調査といえる。

(若林)

English summary

The main fruit from this excavation at Iwakura-Chuzaichi site in Kyoto is below.

1. We found a settlement which seems to be formed in the beginning of Kofun period, 3rd century BC.
2. Eight pit dwellings have unearthed, and over 300 small pits for pillars were around them. These small pits sign that there were actuary many houses or huts with pit dwellings unearthed.
3. According to the range of such remains, the size of the settlement is estimated over 200m diameter circle.
4. Nearby such housing area, 10 small graves have found. They were formed in same age as pit dwellings.
5. We found several lumps of fresh clay on the floor of a pit dwelling and shallow storage pits. By the chemical analysis of them, their component is similar to that of potteries found in this site. So, we can think such unbaked clay was material for potteries.

So these results from this survey contribute to know the aspect of ancient settlement and craft system for their commodity in 3rd century Japan.